令和7年度　刈谷市　共存・協働のまちづくり推進委員会
第3回夢ファンド部会（公開審査会）記録

日時　令和８年１月24日（土）
午後１時30分～午後４時１０分
場所：刈谷市民ボランティア活動センター

出席者

団体名・役職等	氏　　名
愛知淑徳大学　助教	熊澤 友紀子
刈谷市商店街連盟　専務理事	柘植　　祥史
刈谷市ボランティア連絡協議会　会長	矢田部 寿子
NPO 法人刈谷おもちゃ病院　理事長	三輪　　恒雄
防災ママかきつばた　代表	高木　　一恵
一般公募	石田　　彰宏
一般公募	戸田　　広二
刈谷市民ボランティア活動センター	米田　　正寛

事務局

所　　属	補　職　名	氏　　名
市民活動部市民協働課	市民協働課長	神谷　　友理
市民活動部市民協働課	課長補佐兼地域支援係長	加藤　　史彦
市民活動部市民協働課	協働推進係長	遠藤 麻衣香
市民活動部市民協働課	主事	和田　　佑佳
市民活動部市民協働課	主事	前川　　和奏
ＮＰＯ法人ボランタリーネイバーズ	理事・事務局長	遠山　　涼子
ＮＰＯ法人ボランタリーネイバーズ	事務局スタッフ	粉川　　玲子
ＮＰＯ法人ボランタリーネイバーズ	事務局スタッフ	河内 かをる

1　開会・あいさつ

（１）定刻になり、市民協働課協働推進係長が開会を宣した。
（２）市民協働課長あいさつ

2　公開審査

(1)まちづくり活動支援事業

１　特定非営利活動法人ぷらっとほーむ／お仕事見学、体験プロジェクト

ア　プレゼン概要
（団体概要）
・私たちは、生きづらさを抱える子ども・若者を包括的に支援し、制度の隙間にある人を支え、誰もが自分らしく生きられる地域社会の構築を目指して活動している。

（事業概要）
・地域との接点づくりによる若者支援として「お仕事見学、体験プロジェクト」を企画した。
・市内の不登校・引きこもりなど困難を抱える若者が社会との接点を築き、自立へと踏み出すことを目的とする。その第一歩として、若者を受け入れる温かな環境がある東栄町で見学会と就労体験を行い、多様な生き方に触れて社会に出る心理的ハードルを下げ、自分のこれからを考える機会とする。
（実施内容）
・事前アセスメントでニーズを明確にし、安心して参加できる環境を整える。見学会では町内事業所を巡り、収穫・選別などのミニ体験を行う。お仕事体験は有償ボランティアとする。宿泊を伴うため生活支援も実施する。終了後は個別に振り返り、就労アセスメントに基づき今後の方針を整理する。
・昨年度の感想はおおむね良好だったが、参加者の動機づけが十分ではなく、就労アセスメントを有効に活かせなかった反省から、今年は事前準備をしっかり行う。
（アピールポイント）
・自然豊かな環境でリフレッシュし、安心感を得ること。地域住民との交流、自分を知る人のいない環境で力を伸ばし、社会経験や社会生活、仕事への心理的ハードルを下げ、自信を取り戻す機会とする。また、有償ボランティアによる体験は、達成感と次への意欲を生む重要な経験になる。
・東栄町での体験は、引きこもり状態の若者にとって外に出る第一歩である。自然や地域の柔軟な生き方に触れ、多様な価値観を知り、安心できる場所で自分の力を試す経験となる。
・都市部と、山間部である東栄町が連携するこのモデルは、引きこもりや生きづらさを抱える若者支援で複数自治体が連携する先駆的取組と考える。
（刈谷市での活動にどのように活かすか）
・刈谷市内での支援につなげるため、まずニーズ調査の振り返りを行い、相談支援や就労支援機関につなぐ。将来的には市内の事業所でも見学・体験を実施できるよう段階的に進めて、より現実的な就労イメージを持てるようにする。
・今後、企業とのつながりも大切にしながら、お互いのメリットになる具体的な提案を行う。専門性を活かし、困難を抱える若者の理解と、若者が安心して働けるノウハウを事業所へ提供する。企業内にも困難を抱える人や、外国人労働者の増加に伴う新たな課題が既に存在する可能性があり、こうした取組は当事者のみならず企業や市にとっても意義がある。
・本プロジェクトを通じて、誰もが自分らしく生きられるまちづくりに貢献していきたい。

イ　質疑応答

委　員：自閉症の作家である東田直樹さんが著書で当事者としての思いを伝え、世界的な支援の広がりにつながったように、不登校や引きこもりの方々の思いも言葉として残すことで認知向上につなげていただきたい。
１）昨年度の取組を通じて当事者にどのような変化や新たなつながりが生まれたか。
２）市内で仕事体験プロジェクトを実施する予定があるか。継続すれば市内事業所との関係づくりにもつながると考える。

団　体：１）初めて家を離れ４日間の宿泊体験に参加した方は、市内に戻り自動車学校に通う勇気が生まれた。少しずつ自信をつけてきている。
２）当事者は日ごろ親の気持ちや世間の目を気にして暮らしている。余分な負担をかけず、チャレンジする第一歩として地域を離れることが必要と考える。将来的には刈谷市内での支援につなげたい。

委　員：１）対象人数は何名か。
２）貴団体として自立とはどう考えるか。

団　体：１）相談支援は年間約 800 名に対応し、居場所には年間約 100 名の参加がある。いずれも個別性が高く、状況に応じた支援およびつながりの構築が必要である。

2）自立とは、仕事に就くことや一人暮らしを始めることだけではなく、本人が自信を持って生活できる状態と考えている。

委　員：今回のプロジェクトは、個々へのサポートの一つと位置づけられるのか。

団　体：受入人数に限りがあることと、事業所と十分に対話を行うには、20 名でも多いと考える。

【委員からの感想】

・社会では格差や貧富の差が広がり、人工知能の発達によって生活が便利になる一方で、活用できる人とそうでない人の差が生まれ、失業の増加も懸念されている。こうした状況の中、今回の活動は若者に限らず、多世代へ広がる可能性を持つ取組である。活動に深く共感し、応援したい。

2　刈谷発達仲間の会／大人の発達障がい者支援　落語家【柳家花緑】師匠の講演落語会

ア　プレゼン概要

（団体概要）

・大人の発達障がいへの理解を深め、当事者が抱える生きづらさを解消し、地域社会との連携を目指して活動する。

（社会的背景と活動の目的）

・15 歳から 64 歳のひきこもりが推計 146 万人、発達障がい者は全国で 48 万人とされ、年々増加傾向にある。しかしながら、身近に発達障がいの方がいることを知らない、どう接すればよいか分からないとの声が聞かれる。そのため、障がいへの理解を深め、個性の違いを受け入れ、本音で話し合える仲間づくりを目指して、まずは当事者の話を直接聞くことで理解を深め、今後の人生に向けた勇気を得てほしいと考えて企画した。

・障がいの特性による生きづらさや、子どもの将来への不安を抱える方々とともに障がいへの理解を深め、誰もが安心して暮らせる共生社会を目指している。市民の理解が広がり、発達障がいのある方が自然に社会に溶け込めることを願う。悩みを一人で抱え込まず、助け合いながら、活動を刈谷のまちづくりにも活かしていきたい。

（イベント概要）

・開催日：9 月 27 日（日）午後 2 時開演

・会場：刈谷市産業振興センター あいおいホール（758 席）または小ホール（300 席抽選結果待ち）

・ゲスト: 柳家花録師匠（ご自身も発達障がいの診断を受け、その体験を語る落語家）

・入場料: 大人 1,000 円

（体制）

・協力者として、刈谷市ボランティア連絡協議会加盟団体有志、学生ボランティアと連携する。

・広報は、新たに刈谷市観光案内所関連先とライオンズクラブへ支援を依頼する。

（会場変更に伴う費用変更）

・客席数は約 4 割減る一方、経費は 6 割程度までしか下がらず、実質的に支出は変わらない。来場者 200 名を目標とする。

（事前質問への回答）

・集客や市民の関心に関しては、子どもの発達障がいとの関連性がある。子どもに関しては法律で権利（生きる・育つ・守られる・参加する）が保護されているが、成人は自己責任対応が求められている。だからこそ、市民の理解と支え合いによって共生社会をつくっていくことが重要だと考える。

イ　質疑応答

委　員：障がいの有無に関わらず市民全員に関わる意義深いプロジェクトである。

1）活動を始めようと思ったきっかけ

2）イベントとして落語会を選んだ理由をお聞かせ願いたい。

団　体：１）代表が３年前にオンラインで当事者会に参加したことをきっかけに、同じ特性を持ち、生きづらさを抱える人が本音で話し合える場所を作りたいと考え、一昨年２月の生涯学習リーダー養成講座を通じて知り合った現在の仲間に提案し、発足した。
２）講師の花緑師匠は 40 歳で発達障がいの診断を受け、カミングアウトされた。読み書きが苦手だという自覚がありながら、22 歳で真打昇進を果たした。障がいを乗り越えて最年少で真打昇進できたのは、師匠の話を耳で全部聞いて自分のものにしたからであった。発達障がい当事者の声を聞いてもらいたいと考えお願いした。

委　員：周知は短期間では難しい。現在、企業の方々をはじめ、さまざまな人に声をかけて活動しているとのことであるが、反響はどのようか。

団　体：活動の広げ方に悩んでいた際、市内に多くある企業への声かけを勧められたが、大企業は敷居が高く近づきにくいのが実感である。まずは一歩ずつ広げ、いずれ企業からから声をかけてもらえるようになることを期待したい。

来場者：昨年度の落語会で得られた反響を踏まえ、今年の取組にどのように活かすか。

団　体：令和７年（2025 年）６月８日にアイリス小ホールで開催した。有料入場者 170 名で、収支は約５万円の赤字であった。来場者は 60～70 代が中心で、市内在住者が 55%と、市外への周知が十分でなかった点を反省している。今年は PR 体制を見直し、より広い地域に届くよう取り組む。

【委員からの感想】

・地域福祉計画の検討の場においても、ひきこもり等の課題が多く話題に上っている。地域の関係者とも連携して取り組んでいただきたい。また、かりや夢ファンド補助金には申請回数の上限があるため、その先を見据えた基盤づくりもあわせて検討することが重要である。

３　刈谷防災ボランティア／防災福祉フェア～地域の防災力を高めるために～

ア　プレゼン概要

（団体概要）

・東海豪雨の翌年、平成 13 年発足。主な活動目的は、会員の質および各地域の防災活動の向上に努めること。会員は、災害ボランティアコーディネーター養成講座または防災リーダー養成講座の修了者などで構成され、現在 60 名、うち防災士は 35 名である。女性の力強い参画が特徴となっている。

・災害時に住民が困らないよう、日頃から防災啓発に取り組んでいる。会員は、自主防災会、赤十字奉仕団、民生児童委員、会社員、自営業など、多様な背景を持つメンバーで、地域に貢献したいという強い思いを共有し、可能なときに可能な範囲で自発的に活動する、無償の市民ボランティア団体である。

・刈谷市防災リーダー養成講座では、災害図上訓練や避難所運営演習を担当する他、刈谷市災害ボランティアコーディネーター養成講座においては実技指導を行う。防災講話では、家具の固定や、災害時のトイレ、非常持ち出し品、身近なものを活用した防災対策、応急手当などを啓発してきた。また。被災地支援として、昨年および今年、輪島・穴水において炊き出し等の支援活動を行った。

（提案背景）

・会員から地域に貢献したいという強い要望があり、発足 25 年の節目に、これまで培ってきたノウハウや防災技術を整理・集約し、会員のスキル向上と地域への展開を図りたいと考えている。

・防災イベントは、これまで実施してきた福祉と防災の取組や地区住民向けの啓発活動を、より広く地域へ広げるために開催する。

・「防災福祉」と名付けた理由は、これまでの活動を通して、災害時に困るのは要配慮者、つまり災害弱者だと強く感じたためである。令和８年度は、自治会・自主防災会による個別避難計画策定の最終

年度であり、実施のスタートにあたる。一部の学校では総合的学習で福祉と防災の授業が始まる。市の障害者防災部会は、障害のある方と支援者のための防災マニュアル作成に着手した状況である。

・「防災福祉」を副題として、市民や学校を対象とした常設的な啓発活動へと発展させたい。多くの地区、学校、障がい者団体から、災害時に大きな不安を抱えているとの相談を受けており、これらの声に応える取組が必要だと考える。

（事業内容）

・これまで行ってきた防災啓発の取組がデータとして整理されていないため、今回あらためて手順書としてまとめる。手順書は、今後加工や更新がしやすいように電子データで作成する予定である。印刷物では継続的な活用につながらない可能性があるため、ポスターを作ったり内容を加工したりできるように、電子データとして整える。

・防災イベントは 11 月 21 日、総合文化センター小ホールで名古屋大学の福和先生をお招きし、「南海トラフ巨大地震への備え」について講演を行っていただく。展示ギャラリーも活用し、終日にわたり防災啓発を実施する予定である。

（実行体制）

・当団体が中心となり、刈谷市危機管理課、社会福祉協議会、刈谷市民ボランティア活動センター、愛知ネット、連合会などから支援を受けたいと考えている。

（まとめ）

・市内の地域防災力は向上しているものの、要配慮者をはじめとする災害弱者への対策はまだ十分ではない。被災地支援を通じて、事前の備えが最も重要であることを痛感した。今後は、地域の防災力をさらに高め、災害に備えるまちづくりに取り組んでいきたい。

イ　質疑応答

委　員：１）「防災福祉フェア」というタイトルに関して、“福祉”の視点からどのような理念や内容を考えているか。

２）「防災福祉フェア」で想定する参加者数は？

３）広報と冊子印刷について。チラシ 100 部は広く周知するには少なくないか。また、手順書はデータを主とするならば、印刷費は高額な印象である。ポスター試作や非常食の準備などの費用も見込まれ、全体的な予算や印刷費の必要性について見直しは検討されるか。

団　体：細かな点は今後ワーキンググループで具体化するが、福和先生からは「事前の備えが必要」というメッセージを伝えていただく意図で依頼を予定している。対象は自治会や団体、学校関係者などを中心に考えており、市民全員に広く声をかける想定ではなかったが、アドバイスをふまえて検討したい。福祉は専門ではないため、場を作ることで知恵を集めて全体で一緒になって刈谷を盛り上げていきたい。

委　員：今回の申請団体ともつながって、よりよい活動にしていただきたい。

団　体：目の前の一歩を確実に進めることで、その積み重ねがいずれ刈谷を変えていくと信じて取り組みたい。

委　員：市内大手企業では防災に関する取組を進めている企業も少なくない。可能であれば、企業にも協力を呼びかけることで、活動の幅がさらに広がると考える。

団　体：私たちの会にも企業の方が一部参加されているが、まだ“企業全体を巻き込んだ活動”には至っていない。企業の皆さんとも一緒に取組を広げていければと考える。

【委員からの感想】

・東海豪雨で消防団として活動した経験から、防災イベントの重要性を強く感じているが、認知が広がらず、参加者を集めるのが難しいという問題を抱えている。今回のイベントは内容が多岐にわたり、焦点が分かりにくくなる点は懸念があるが、どれも大切な取組である。中長期的に継続し、関係団体と連携しながら、一つずつ認知を広げていただきたい。

４　富士見町自主防災会／
みんなで描こう！つながる防災・ひろがる地域力～防災倉庫を地域をつなぐシンボルへ～

ア　プレゼン概要

（団体概要）

・地域の防災力・地域力を高めるために、地区の防災活動の支援や独自の防災フェスティバル、防災備蓄品の整備、情報発信、防災スキル向上に取り組む。平成 24 年設立、会員 108 名。「自分たちの町は自分たちで守る」を理念に、地域の防災会と協力して活動している。

（活動内容）

・五軒屋公園の防災倉庫を、地域の声を反映したデザインで鮮やかに塗装し、親しみやすい地域のシンボルとして整備する。防災意識の向上に加え、日頃から助け合える関係づくりや安心して暮らせる地域づくりにつなげる。

・ステップ１は、防災倉庫に地域のアイデアを取り入れた鮮やかなペイントを施し、親しみやすいシンボルとする。ステップ２では、そのシンボルを中心に防災フェスティバルを開き、交流と学びの場をつくり、防災意識と地域のつながりを強める。ステップ３では、公園を利用する人や通勤・通学・散歩で通りがかる人たちの目に自然と触れて防災を身近に感じられるようになり、防災意識と地域力が自然と育つ環境をつくる。最終的に、シンボルとなった防災倉庫をきっかけに、世代を超えた交流や助け合い、安心して暮らせる地域づくりを進める。

（体制）

・刈谷市危機管理課や自治会、自主防災会、町内会、子ども会、防災関係団体の助言・支援を受けながら、地域全体で協力して取り組む。

（収支計画）

・団体の会計は、前年度繰越金・町内の協力金・緊急時引当金等で成り立ち、会議やイベント、防災備蓄品、消耗品の費用に充て、残金は翌年度へ繰り越している。今回の事業費はペイント費とイベント費の約 30 万円を、繰越金 10 万円と補助金 20 万円でまかない、通常活動と新規事業の両方の収支を見通している。

（日程）

・5 月に町内会、自主防災会の承認を得て、地域団体と協力体制を整える。7～8 月に子どもたちからデザインを募集・決定し、9～11 月に専門業者とペイント作業を進める。12 月からフェスティバルの計画を立て、翌年３月に開催する。次年度以降も継続して活用していく。

（まとめ）

・地域の防災意識やコミュニティの希薄化という課題に対し、鮮やかにペイントした防災倉庫を、日常的に防災を考えるきっかけや世代を超えたつながりを生むシンボルとして活用し、助け合える安心な地域づくりを進める。将来的には市全域への展開も目指したい。

イ　質疑応答

委　員：地域の皆さんから募ったアイデアを基に、ペイントは業者が行う提案であるが、自分たちで塗る方が面白いのではないかと思う。その点について検討したのか知りたい。また、毎年費用がかかるため、今後の継続費用をどう確保する予定か。

団　体：大型コンテナで高所もあることから、安全性と 13 年程の耐久性を考慮して、全体は専門業者に塗装を依頼する。ただ、パネルを設けて子どもたちにデザインを募集し、部分的に実際に塗ってもらうことも考えている。費用に関しては、町内からの協力金のうち、３万円を積み立て、10 年後に塗り替える。パネルは３年ごとに塗り替えて、定期的にデザインを更新する。

委　員：豊明市や千葉県浦安市での防災倉庫のペイント事例、三重県で遊具と組み合わせた防災広場の事例があるので、ヒアリングするとよい。

委　員：商店街組合や地元企業、団体にスポンサーとして協賛金をいただき、名前掲示をする方法もある。近隣の協力先に声かけをいただき、市全域へ展開いただけるとよい。

団　体：幹線道路沿いの店舗とはまだ関係性を構築できていないため、活動を通じて関係をつなぎ、支援をいただける形にしていきたい。まずはこの取組を成功させて関係性を築き、その事例を他へ展開することを考えたい。

【委員からの感想】

・防災を前面に出すと参加しにくいイメージがある中で、幅広い年代が関わって防災倉庫を鮮やかにペイントして話題になれば、興味を持つ人を増やすきっかけとなる。今後の展開を楽しみにしている。

５　重原 歴史を学ぶ会／重原歴史本を通して地元愛を育む

ア　プレゼン概要

（目的・きっかけ）

・“重原”が“重原”の本を作ることで「シビックプライド＝地元愛を育てる」ことを目的とする。

・他の地区では歴史本が作られており、それをうらやましく思う一方で、「重原にはもっと誇れる歴史があるのに、知られないままなのはもったいない」という声が上がった。そこで、歴史を残すだけでなく、きちんと“伝える”本を作ろうと、９人が集まった。

（課題の状況）

・重原地区は他地区と同様に自治会の担い手不足や高齢化が進んでいる。長年暮らす方々の高齢化、移住者の増加、地域との接点が持ちにくい子どもたち。このままでは地域のつながりが弱まり、防災力の低下にもつながりかねない。特に移住者や子どもたちは重原の歴史を知らない人が多いので、まず地域を知ってもらい、好きになってもらうことが必要だと考え、重原の歴史をまとめた「本」という形で伝えることにした。

（事業概要）

・500 冊制作・発行。申請書では 800 円で販売する予定としたが、地元の印刷会社と相談し、1,000 円に変更した。300 冊は販売し、100 冊は寄付。50 冊は各々企業や個人からの協賛金のお礼としてプレゼントする。

（メンバーの専門性・顔ぶれ）

・さまざまな得意分野を持つ人が関わる。詩吟の達人は重原八景を漢詩で表現し、文化的な厚みを加える。読み聞かせ活動に携わる人は、地域の言い伝えや昔話を大切にし、子どもにどう伝えるかという視点で支える。家族から地域の歴史を伝え聞いてきた人は、生活に根ざした視点で地域の歴史を語る。このほか、子ども向けの内容や大人向けの読み応えのある内容を担当する人、他市の現地調査を担う人など、それぞれの視点を持ち寄り、１冊を作り上げていく。

・あえて「本」にしたのは、家族で一緒に見る体験を大切に考えたため。前半は子ども向け、後半は歴史好き向けの専門的内容で構成している。制作過程では長年行方不明だった資料も見つかり、スクープの発表も含めて重原の魅力を伝える一冊になると考えている。

（冊子の活用）

・地区の小学生向けの読み聞かせや、一般向けのウォークラリー、意見交換会を実施する予定である。

・事業を通じて、子どもや移住者、長年暮らす人々が重原を知り、重原を好きになることを目指して活動する。

イ　質疑応答

委　員：これまでも地域を知るための取組はあったと思うが、この本をつくるにあたり、そうした過去の取組を参考に検討したか。

団　体：「重原の歴史」という本があるが、内容が難しく手に取りにくい面があった。そこで、前半は子どもにも読みやすく、後半は深く学びたい人向けの専門的内容とした。本の中では「重原」の名前の由来などを、子どもでも興味がわく形で紹介する工夫をしている。

委　員：シビックプライドの醸成が目的であれば、1,000 円以上の価値がある冊子として、今後の活動につなげていただきたい。また、作って終わりではなく、その後の活用が重要であり、地域の認知や交流に活用していただきたい。

来場者：重原への愛を感じる発表であった。冊子のページ数と、町内の方への配布予定を教えていただきたい。

団　体：A4 サイズカラー120 ページを予定。調べたことを全て載せるとページ数が増えてきているが価格に関わるため 120 ページ以内とする。重原の全 1,500 世帯への配布は難しいため、500 冊用意するうち、販売 300 部、残りは地域や他地区の地区長にも寄贈する。

【委員からの感想】

・子どもたちへの読み聞かせを通して地域を知り、将来地区を支える力となってほしい思いが感じられた。読み聞かせを続け、地元愛を育ててほしい。何より、団体の皆さんの地元愛の強さが伝わる内容であった。歴史本の完成を期待します。

3　結果発表・全体講評

(1)結果発表

まちづくり活動支援事業（※採択には基準点 12.5 点を上回る必要がある。）

発表順	団体名	事業名	審査点	会場点	合計点	採否
1	特定非営利活動法人ぷらっとほーむ	お仕事見学、体験プロジェクト	18.75	1.10	19.85	採択
2	刈谷発達仲間の会	大人の発達障がい者支援　落語家【柳家花緑】師匠の講演落語会	18.63	0.66	19.29	採択
3	刈谷防災ボランティア	防災福祉フェア～地域の防災力を高めるために～	18.75	1.18	19.93	採択
4	富士見町自主防災会	みんなで描こう！つながる防災・ひろがる地域力～防災倉庫を地域をつなぐシンボルへ～	18.63	1.25	19.88	採択
5	重原 歴史を学ぶ会	重原歴史本を通して地元愛を育む	18.00	0.81	18.81	採択

・審査結果については、後日団体あてに郵送するとともに、市のＨＰにも掲載する。
・交付申請・決定は来年度４月以降に手続きを行う。
・領収書は、令和８年４月１日から令和９年３月 31 日までに発行されたものが対象となる。

（2）全体講評（熊澤審査委員長）

・皆様、改めまして、プレゼンテーションありがとうございました。そして採択おめでとうございます。
・今回で３回目の参加だが、申請団体が一番多かった。そして皆さん楽しそうで、熱が伝わった。また、刈谷のために何かをしたいという気持ちが、本当に心に響いた。
・審査基準は、主体性・協働性（課題を自分ごとと捉えているか）、公益性（他の人にとってもメリットになるか）、オリジナリティ（先駆的な活動か）、実現性、そして発展性・継続性である。
・補助金を活用して本を出版する、イベントを開催するなどは手段であり、その結果、何を達成していくかという目的が重要だという意見が多くあった。委員で話し合った意見を私の方からまとめてお伝えしたい。

（個別団体講評）

特定非営利活動法人ぷらっとほーむ

・当事者が一歩外に出ることの大変さを感じ、家族や支援者の想いが非常によく伝わった。一方で、当事者の声を、もっと強く発信していくといいのではないかという意見があった。
・事業所が取り組むイベント（遠足、お泊り会等の外出イベント）とどのように差別化するか、東栄町と刈谷市の交流に発展していけるとよいといった意見があった。
・「お仕事見学」という事業名であるが、仕事につなぐことが成果ではなく、自分らしく生きることが目的との言葉に共感した。そうした社会の実現に協力していきたいと感じた。

刈谷発達仲間の会

・当事者が声を上げることの強み、説得力があり、意気込みを感じた。当事者であってもそうでなくても、「笑い」という場を通じて少しずつ啓発を続けていくことには大きな意味がある。
・市内には子どもの発達支援に取り組む団体がある。大人になると支援が減る傾向にあるため、関係団体が横のつながりを持ち、刈谷市ならではの取組としていくことが重要である。

刈谷防災ボランティア

・歴史もあり、ボランティアの楽しさや市民活動を長年続けることの大切さを学んだ。
・防災イベントは行政、民間、企業が行うもの等多数ある。団体ならではの特色を、イベントの実施を通して見出していただきたい。

富士見町自主防災会

・アートを通じて防災を地域に訴えるユニークな活動である。アートの力を活かして地域に貢献する手法がどのように目的達成につながっていくか。すぐに効果が出るものではないかもしれないが、長期的な視点で評価し、どのように活かしていくか考えながら進めることが大切である。

重原 歴史を学ぶ会

・地元愛がすごく伝わった。形に残るものは補助金の趣旨にも合っており、素晴らしい事業である。
・出版して終わりではなく、内容の伝え方、たとえば読み聞かせ会やウォークラリーを行う等、出版後の発展・継続性に期待が寄せられた。本が出版された後のこともしっかりと話をしながら進めていただきたい。

・最後に、かりや夢ファンド補助金採択団体の中には、共通のテーマで取り組む団体もいる。これらの団体同士、横のつながりをもって一緒に取り組むなど、ネットワークづくりの場としても活用いただきたい。審査会は年１回の開催であるが、日頃からやり取りをしていただき、協働の土台を作っていただけるとよい。来年度実施する際もよろしくお願いいたします。